

第四夜 ユズラレハの伝言

盆の入りの午後――。仕込みの鍋を洗ってひと仕事終えた酔鏡の主人は空瓶の入ったビールケースを抱えて路地に出た。酔鏡ではビールは基本的にビアサーバを使った生ビールが供されるが、客のリクエストに応じるために瓶ビールも常備されている。この季節は殊更に消費が激しく、ケースの出し入れは主人の日課となっていた。

「あの、……」

格子戸を出て、エアコンの室外機の脇にケースを下ろした主人の背中に、やや遠慮がちな声が掛けられた。

「あの、少々ものをお尋ねしたいのですが」

些か時代がかつた物言いに主人が振り返ると一人の男が立っていた。

古い家の仏間に飾られている先々代の写真からすっぽり抜け出てきたような老人である。白地に紺緋の着物に黒い帯。足元は高らかな音を立てそうな下駄で、頭にはご丁寧な白に紺の帯が付いたカンカン帽を被っている。まるで鎌倉の文士が道を間違えて迷い込んできたようで、いつそステッキを持っていないのが不思議なくらいだった。右手に小さな籐編みのトランクと人形焼きの紙袋。左手には角張った風呂敷包みを下げていた。

「はい、何でしょ」

周囲に誰もいないのを確かめて、主人は腰を伸ばしながら答えた。

「この辺りに、寺田という家がございませんでしょうか」

男は四角い輪郭の顔を少し傾げるようにして道を尋ねた。帽子の下に覗く耳が人並み外れて大きく見えた。

「寺田さん？ええと、……」

主人はじつと目を細めて記憶を手繰る。

「ああ、絵のセンスのどこかな。その方、絵を描かはるんちやいます？」

「そうです。そうです」

男が安堵したように頷いた。

「それでしたら、もう少し山側（北側）ですわ。あ、お入んなさい。地図描いたげましょ」

主人は先に立って男を店内に入れてやった。主人が伝票の裏を使って地図を描いている間、男は物珍しそうに店内を見回していた。

「こちらのお店は今日も営業ですか」

流暢な標準語で男は尋ねる。

「ええ、五時からです」

地図を描き終えて主人が顔を上げると、男は店の壁にかかったパステル画を見ていた。気配に気付いて振り返った男と目が合う。男は両手に荷物を持ったままで立っていた。その口元が幾度か開きかけては閉じ、眼差しがこちらを伺うように向けられては逸らされた。何か言いあぐねている雰囲気を感じて、老練な居酒屋店主は水を向けた。

「何ですやろ」

男は安堵したように表情を緩ませると、

「初対面で大変不躰ぶしつなのですが、荷物を一つ預かって頂けませんでしょうか」

と言った。左手を軽く上げて紫色の風呂敷包みを振って見せる。戸惑い顔で目を細めて包みを見詰める主人に、男は慌てたように言い繕った。

「いや、あのですね。私、これから寺田君の家を訪ねるつもりなのですが、よく考えるとこの風呂敷は余計だったと気が付いたというか、ちよつと事情があつて彼に詮索されたくないのです。後ほど必ず取りに上がつて一杯頂きますので、お邪魔だと思つたのですがお店の隅に置いておいてもらうわけにいきませんかでしょうか」

「そら、別に預かるだけでしたら、一向構わせませんけど……」

なお訝しげに縮緬の風呂敷の風合いを見るように目を細める主人に男は早口で畳みかけた。

「いや決して怪しい物や危ない物ではありません。ごく私的なのどうか、つまらないもので……」

自身に言い訳するように男の声は尻すぼみに小さくなった。

「ま、構いませんよ。お預かりしましょ」

差し出した主人の手に男は包みを委ねた。箱か本でも入っているかのようななかつちりとした立方体で包みは思いの外に重かった。カウンターの隅に下ろした時、中で紙の擦れる音がした。

「あ、申し遅れました。私、山下と申します」

男は手ぶらになった左手を懐に入れると黒い名刺入れを取り出した。右手の荷物を足元に下ろすと、白い名刺を一枚抜いて主人に差し出す。その所作は服装に似合わず、三十年選手のサラリーマンのように垢抜けていた。

名刺には山下義男とあり、肩書は郷土史家と書かれていた。住所は東京になっていた。

山下が去り、奇妙な荷物だけが残った店内で主人の仕込みは続く。冬瓜を煮込んで冷まし、そぼろの餡を作り、米を研ぎ、魚の骨を揚げる。優雅に見えて一分の隙もない精緻な演舞を演じるように、主人の手捌きは澁みなく続けられた。

やがて、猛暑を沸き起こす日差しもようやく収まりをみせ、遅い夏の夕暮れが神戸の街に訪れる。遠くで教会の鐘の音が響き始める。それを耳にした主人の顔が、口一杯に酸っぱいものを含んだように歪んだ。

聴け 鐘鳴りぬ

忘れていたようで決して忘れ得ぬ感傷。この古い居酒屋を開かずと以前に受けた疵は決まって、あの鐘の音に呼び起こされて主人の心の中で羽虫のようにさわいだ。

いざさらばうかららつねの

日のごとくわれをなまちそ

つねならぬ鐘の音声

もろともに聴きけんをいざ

あかぬ日のつひの別れぞ

わがふるき日のうた

美しい娘が書き残した流麗な女文字。三好達治の詩の一節は主人の胸の中に深く刺さった棘となつて今も彼を呪縛し続けている。

鐘が止んだ。主人は感傷を振り払うように首を振り、唇を強く結んだ。壁の黒いスイッチを勢い良くはね上げる。軒に下がった提灯に朱い火が灯り『酔鏡』の文字が黒々と浮かび上がった。

いずれ語られる主人の古い疵は一旦脇に置くこととして、今夜の主人公は山下という男である。彼の再訪を待ちながら、今宵も居酒屋『酔鏡』の夜が静かに始まった。

酔鏡の夜は静かに始まったが、いつまで経っても静かなままだった。かくも準備万端抜かりなく整えて、酔客達を待ちわびているというのに人生はままならないものである。

十分経ち、三十分経ち、六時前になつても訪う者は誰もいない。カウンターの中の丸椅子に座つて所在な気に夕刊を読んでいた主人は壁のホワイトボードに目を遣つた。

お品書き

夏！

そうめん、冷汁あります。

と達筆な字で書かれている。再び新聞に目を戻した主人の耳に聞き覚えのある下駄の音が響いた。遠く路地の向こうからその音は近付いてきて、やがて格子戸の前で止まった。主人は新聞を畳んで立ち上がり、格子戸が開くのを待った。やや立て付けの悪い戸を苦労して半分程開き山下が顔を出した。

「いらっしやい」

主人の威勢の良い声が響く。

「あ、先程はお世話になりました」

山下はカンカン帽を脱いで、白髪の方主頭を丁寧に下げた。

「寺田センセンとこ、すぐわからりました？」

「ええ、助かりました」

「そら良かった。お帰りなさい。何にしはります」

「生ビールを」

言つて山下は赤い革張りの丸椅子に腰を下ろした。手に提げたトランクと人形焼きの紙袋は足元に置く。

主人は頷くと魔法のような手際で素早く今日の一杯目のビールをジョッキに注ぎ、黒い小鉢と並べて山下の前に置いた。

「この一杯は俺の奢りです」

主人の言葉に山下は怪訝そうな顔をする。

「俺の流儀で、その日の最初のお客さんの一杯目は俺の奢りと決めとるんです。常連さんの中にはそれを目当てに毎度開店と同時に駆け込んで来はる人もおるんやけど、今日はさっぱりやなあ」

と主人は笑った。山下は『頂きます』と言ってジョッキを傾けた。

「盆の入りですからなあ。皆さん里帰りされておられるんじゃないでしょうか」

「かもしれませんな」

言いながら山下は箸を割って小鉢に手を伸ばした。冷蔵庫に収められていたのだろう。地肌がひんやりとしていて心地好い。

「冬瓜ですか」

「ええ、鶏のそぼろ餡にしてみました」

箸先で柔らかく煮た冬瓜を割ると山下は掬い取るようにして口に運んだ。微かに甘い夏野菜に甘辛い餡がよく絡んでいる。針生姜の風味が舌先をよりいっそうひんやりとさせた。

「これは良い。なんだか急に夏が好きになりそうです」

山下は笑って箸を進めた。と、何の前触れもなく格子戸が勢い良く開かれた。

「うわっちゃあ。やっぱり甘かったか」

落胆に肩を落した世にも情けない鍾馗しやうき様のような大男が戸口に立っていた。

「固まっとらんと早よ入れ」

大男の後ろに誰かいるらしく甲高い関西弁でせつついている。

「いらっしやい。仲良うご出勤で」

主人は威勢の良い声を張って笑いながらバリキとユウやんを迎え入れた。

「だから言うたやん。六時にもなって一番ビール狙うんは砂糖より甘いて」

パンチパーマの男が早口に捲くし立てながら、山下から少し離れて腰を下ろす。

「アスリートはたった一パーセントの希望でも最後まで捨てたらあかんねんて」

大仰なことを言いながら鍾馗様がパンチの隣に椅子を盛大に軋ませて座る。

「それよりおっちゃん聞いたって。砂糖いうたらユウやんなあ、トマトに砂糖かけて食べる言うねんで」

「何が変やねん。甘いは旨いや。塩かける奴の気が知れんわ」

「ま、人それぞれやし」

ビールと付け出しを二人の前に並べながら主人は心なしか気の毒そうな目でユウやんを見遣った。

「あのう。横合いから失礼だが、私の家内の里ではトマトに砂糖をかけて頂きますよ」

山下が遠慮がちにユウやんに声を掛けた。

「うわあ、おっちゃん、物の値打ちが分かってはるやん。良え人やなあ。ホンマもんの食通やな

あ」

相好を崩してユウやんがまたたいそうなことを言う。

「香川の坂出市ですが、あちらでは正月の雑煮は白味噌に餡入りの餅ですし、バラ寿司には金時豆を入れるそうです。そちらの方がおっしゃられるように甘いは旨いと考える土地柄みたいですね」

「いやっ、めっちゃ話の合いそうな人やなあ。初対面ですよ。わし、一度会った人は絶対忘れへんし。ご旅行？どこから来たん？あ、そっち座っても良えですか？」

気安いことでは他の追隨を許さないユウやんは、ろくに返事も聞かずにそそくさと席を移る。

「ああ、山下と申します。大阪に少々用事がありましたので、せっかくですから足を伸ばして神戸の友人を訪ねた帰りです」

「寺田センセって、ユウやん知らんかな。時たま来られるお客さんやねんけど」

「寺田センセ……？ああ、あの絵描かはる」

ユウやんがカウンターの後ろの壁を振り返った。柔らかい緑を基調にした小さなパステル画が掛けられている。なだらかな丘の上に麦わら帽子を被った白いワンピースの少女が向こうを向いて立っている絵だ。萌え立つような若草の緑がことさら印象的である。

「しかし、寺田君が先生と呼ばれるのは、私までこそぼゆい感じだ」

「けど、結構有名な方ちやいますのん？絵本の挿絵とかも描かはって。その壁の絵も、ここ

が気に入ったというて、タダでくれはってんけど良えのんかなあて思いましたもん」

「気の良い男ですから、気にせずもらっておけば良いでしょう」

山下は如何にも寺田君らしいと笑った。

「今日はこっちにお泊まりですか？」

ユウヤんが冬瓜をつつきながら尋ねる。

「いや、最終ののぞみで戻るつもりです。まあ、ここを八時頃に出れば間に合うのではないかと考えているのですが」

結構イケる口らしい山下は、気ぜわしいのを惜しむように言いながら、主人の後ろのホワイトボードを覗き込んで小首を傾げている。

「あ、あのお品書きですやろ。初めて見たらびっくりしますわな。心配いりませんよ。わしにもさっぱり分かりませんから」

「なんでやねん。夏らしいものをいろいろ用意しました言う意味やん」

「わからへんて。ええと、わし、そのれいじゅうとかいうやつにしてみよ。それ何？」

「ん？ああ、冷汁ひやしむやな。宮崎の名物で冷たい味噌汁やと思うてくれたら良え」

「なんや残りもんみたいやけどそれひとつ」

「ほいよ。山下さん何作りましょ。うちレギュラーメニューでないんですわ。揚げもんがほしいとか、何かさっぱりしたもんじゃないとか、お腹空いてるんやけどとか、具体的でいうてかまへんの、何かこんななん食べたいなあて言うてくれたら夏らしいもん作ります」

「何か軽いつまみを頂いて良いですか。あとビールのお代わりを」

「それやったら揚げ物もんでもしろいのんがありますわ。それ出しましょう」

「おっちゃん、俺めっちゃ腹減ってるねん。ちよつと頼りない気もするけど、とりあえずそうめんにして」

バリキのリクエストに主人は頷いた。

「そや、話は変わるけどセンセに紹介してもろた病院に行つて来たで」

ビールを空にしながら、ふと思いついたようにユウヤンが言った。

「軽い胃炎やて。けどやっぱり病院はかんべんやな。あの雰囲気があかん。何が怖いてわし、

この世で病院が一番怖いかもしれん」

「またたいそうな」

「けど、バリキにかて怖いもんくらいあるやろが」

「俺に怖いもんなんてあるかいな」

スポーツカットの頭を撫でてバリキが笑った。

「いやなんかあるやろ。ヤクザとか病気とか熊とかゴキブリとか」

「また脈絡のないもん並べたな。まっとうに生きとつたらどれも怖ないって」

「怖いといえば私、妖怪が……」

不意にユウヤンの横で山下が口を開いた。

「怖いんですか？」

ちよつと意外そうにユウヤんが尋ねた。

「いえ、好きだったんです」

カウンターについていたユウヤんの肘がかくんと外れた。

「それも、死人憑しびとつきのような怪談めいた噺を聞いたり読んだりするのが好きになちよつと変わった子供でした」

「そんな噺聞かされたら、わしやったら夜中にトイレに行けんようになってたけどなあ。バリキはそういうのも平気なんか？」

「あたりまえや。おれにこわいもんなんか、あるかい」

バリキはユウヤんから目を逸らして言った。

「なに台本棒読みしてるねん。わかり易いやっちゃなあ」

「あ、電話をかけないといけないのでした」

そそくさと携帯電話を引っ張り出そうとするバリキにユウヤんが離れた席から裏手ツツコミの真似をする。

「小芝居やめい。ほら見てみい。ちゃんと怖いもんがあるやないかい」

「なんのことでしょうか？」

再び何の前触れもなく店の格子戸が音を立てた。バリキが『ひいつ』と喉を鳴らす。上下に揺すられながら細く格子戸が開き生暖かい風が流れ込んでくる。いきなり項うなじを撫で上げられたような気がしてバリキは大きく身震いをした。その狭い隙間から身を滑らせるよう

にひよろりと背の高い男が店に入ってきた。銀ぶちの丸眼鏡をかけた大正時代の書生のよ
うな風情の男である。

「似たような喋り方しはる人が来はったで」

ユウヤんが山下に説明するように言う。

「なんだかひと雨来そうな感じですよ。やけに蒸し暑くてそれに風がない」

センセはビールを注文しながら言った。

「外まで笑い声が聞こえてましたけど何か楽しいことでもあつたのですか？」

センセはブリーフケースを脇に置いてバリキの隣に座った。

「ええとこ来はったわ。な、センセ聞いたって」

ユウヤんはにやにや笑いながらバリキの方を見遣って言う。

「いや、すっかり夏やねいう話をしてたところだな……」

慌ててバリキが割り込む。

「そうそう。すっかり夏やし、一つ百物語でもして涼もかて言うてたところやねん」

意地悪くユウヤんが引き継ぐとセンセはわが意を得たりとばかりに頷いた。

「ほう。それは間が良い。丁度面白い話を聞いたばかりでしてな。聞きたいでしょう？」

センセの口調はなぜか途中からおどろにしわがれ、『聞きたいでしょう？』というフレーズは

疑問文と思えない強制力を感じさせた。

「ちよつ、ちよつと待て。なんで急に『あなたの知らない世界』にならなあかんねん」

センセは幽鬼のごとく体を揺すってバリキの背後に立つとしわがれた声で囁いた。

「夏だから」

背中に定規を差し込んだようにバリキの背筋がピンと伸びてそのまま硬直した。

「知人が先月引っ越しをしましてね」

センセは素に戻ると丸椅子に腰を下ろして殊更深刻めかした口調で語り始めた。

「少し落ち着きのないところのある人物なのですが、荷物の片付けも早々に近所を探検がてら散歩にでかけたんだそうです。真っ先に向かったのは公民館の中にある図書館。本の虫のような男ですから。が、公民館の前まで来てみたら脇に小さな美術館が建っていた。

『水墨画展』というフレーズに惹かれて何の気なしに中に入ったんだそうです」

喉が渴いていたのだろう。出されたジョッキを一気に半分ほど干してセンセは続けた。

「美術館の中は少々黴臭くて、やけに照明が暗い上に人が誰もいなかった。薄気味悪くなつてすぐに出ようとしたらしいのですが、壁の隅にかかった一枚の絵が目にとまった」

記憶を手繰るようにセンセは目を細めた。

「まるで手招きされるように彼はその絵に引き寄せられて行ったそうです。四号か五号くらいの小さな絵、丁度そのパステル画くらいのサイズですかね」

センセは振り返ると壁の絵を指した。

『上海』と味気ないタイトルが付いた中国の路上の風景画なのですが、取り立てて目を惹くような技量の絵でもないのに見る者を去り難くする不思議な引力があったそうです。よ

く見ようと絵に顔を近づけたら額に嵌めたガラスに背の高い男が映っている――。そう、自分のすぐ後ろに男が立っているんです」

センセはまたジョッキを傾けてビールを流し込む。よほど暑かったと見える。「ぎよつとして彼は振り返ったが誰も立っていないなかった――」

「ひいつ」とバリキが絞め殺されそうな悲鳴を上げて丸椅子をガタつかせた。

「慌てて正面を向くとやはり痩せた男が映っていてじいつと彼の背中を見ているのです。あ、どうも」

センセは冬瓜の小鉢を受け取りながら空になったジョッキを主人に渡した。

「彼は改めて絵の構図を見ました。古めかしい中国の街路に荷馬車や人力車の往來を挟んで人が行き来している。道端には屋台のもの売りの姿も見える」

気を持たせるようにセンセは言葉を一旦区切って、改めて口を開いた。

「不意に彼は『それ』に気付いた。その屋台の脇に人民服を着た背の高い男が立っていて、じつと彼を見ていたんだそうです」

センセが黙ると店の中は思いの外静かだった。

「ふつと彼と目があつたかと思うと、絵の中の男はすぐさま目を逸らした……：：：のような気がした。気が付くと硝子に映る影は消えていたそうです」

店はまた静かになる。

「ええと、なんかちやう話しよか」

「まあ待ちや。そういう話って後日談があったりするんちゃうん？例えば、その知人が次の日から行方不明になったとか」

「あのねえ。だったらどうやって私はこの話を聞いたのですか。彼はピンピンしてますよ。ただ……」

「ただ？」

「会社の中国進出が決まったそうで、立ち上げスタッフとして来月から一年間上海に行くことが決まったそうです」

店の中の静けさが湿り気を帯びてきたような気がした。

「なんや下手な怪談より怖いな。無事帰って来はることを祈っとこ」

ユウヤンはお題目を唱えるジュスチャーをしかけたが、ふと隣の山下を見て声を上げた。

「げっ、何食べてはるの？」

山下の前に黒い小鉢が出されていて、三センチほどに切った魚の骨がこんもりと盛られていた。

「大将、いくら何でも魚の骨で商売するか？」

「おいしいですよ。これ」

山下に勧められてユウヤンも一つ摘ませてもらおう。

「あつ、イケるわ。これ何？」

「鰻うなぎの骨を揚げたもんもんに軽く塩胡椒してるねん。原価はめっちゃ安いし、良え肴になるやろ。

ほい冷汁どうぞ」

大振りの椀がユウやんの前に出される。

「実はいろいろやねんけど、今日は鯛のアラで出汁取ってズッキーニと合わせてみた」

一口飲んだユウやんは、すかさず『軽めで良えから熱いご飯』とリクエストした。バリキの目の前には丼に入ったそうめんが出てきた。つけ麺ではなく、ぶっかけのスタイルらしい。変わっているのは、そうめんの上にこんもりと肉味噌が盛られ、その周りを短く刻んだ白菜のキムチが囲んでいることである。

「そうめん版ジャージャー麺ってのを作ってみてん。よう混ぜて食べて」

言われずとも箸を突っ込んでわしわしと混ぜていたバリキは、さっそくかき込むようにそうめんを手繰る。

「辛あ。けど、ラーメンよりさっぱりしてて良えわ。それにこの肉味噌、なんやろ……、変わった香りがあつてクセになるやん」

「セロリをちよこつと入れてるねん。全体を和中華のアジアンテイストでまとめて、洋の隠し味でマテますいう仕掛けや」

隣のセンスも胃を刺激されたようで、何かポリウムがあつてさっぱりしたものをと、我が儘な注文をした。主人は『それやったら』と言って、冷蔵庫を開く。今日の料理は冷蔵庫から出てくるものが多いらしい。

「あと、強めの日本酒があれば頂きたいのですが」

センセにしては珍しいリクエストである。

「変わったところで日本酒の凍結酒呑んでみはりますか？原酒を使うてるから普通の日本酒より度数がちよつと高めですわ」

センセが頷くと主人は細身の硝子のボトルを出した。プルトップの栓を抜くと木の匙を差して、空のオールドファッションドグラスと一緒にセンセの前に並べる。

「火入れしてない生の原酒を瞬間冷凍してはるんやそうです。普通、しぼりたての生酒は蔵元まで行かんと呑まれへんねんけどそれが家でも楽しめるいう仕掛けですわ。シャーベット状になつとるから、ちよつとずつ崩してグラスに移して呑んでみて。で、これがさっぱりしてボリユームのある肴や」

白い平皿に大葉が一枚敷かれていて輪切りになった白い肉が盛られている。

「自家製のハムやねん。鶏の胸肉使うてるからあつさりしてる。山葵醤油で食べてみて」

主人の声に被るように店の格子窓が突風に煽られて盛大に硝子を震わせた。窓の隙間から漏れ入る空気は真綿のように重く、微かに湿り気を帯びている。雨が近いらしい。

「怖い話言うたら、知り合いがお遍路さんに行った時にえらい怖い目に遭うたんやて」

「ちよつ、ちよつと待て。まだ続くんかい。山下さん、なんか言うたつて下さいよ」

「いや、私からはなんとも」

山下は曖昧に笑った。

「まあ遠慮せんと聞き。六十年くらい前の話やから終戦直後やな。経緯はよう知らんけ

どその人、お仲間と何人かでお四国さん回らしたんやて。もちろん歩きやで。毎朝四時に起きて、日も上らん内に出発して、お寺からお寺へ回って行くわけや。で、日が暮れたらお寺の宿坊いうんか、そこに泊まるねん」

ビールを空にしたユウやんはジョッキを振って焼酎のロックを頼んだ。

「まあ、そうやって回り始めて何日目かのことや。慣れん運動して疲れが溜まつとったんやろな。朝から具合が良くないなあって感じてはつたらしい。頭がぼうつとしてお腹も空かへん。お寺で出してくれた握り飯も食わずじまいで出発した。後から考えるとその体力が落ちてるところを質の悪いモンに見込まれたんちゃうかて言うてはつたわ」

相変わらず格子窓からは生暖かい風が断続的に漏れ込み、客達の首筋を撫でていく。

「その辺は一面に葦が生えとって、人の背えより高かってんて。道は一人通るんがやつの細い道で、縦に一列になつて歩かなしやあない。まだ真つ暗な中、星明りと前の人の背中だけを頼りに歩いて行くねん。格好はもちろん白装束や。左手に杖突いて右手に鈴を持って、歩く度にその鈴をリン。リン。って鳴らしながら進むねん」

西に傾いた月がかるうじて足元を照らしている。見えるのは前を歩く大野さんの背中だけ。大柄なその体に隠れてその向こうが見えない。道を外しようもないのにむしように心細くなるのはなぜだろう。

だいじょうぶ。だいじょうぶ。この背中の後をついていけばだいじょうぶ。

「その人、列の真ん中へんを歩いてはってんけどな。なんぼも歩かんうちに、どうもおかしいって気になり出した。何がどうやって、巧く説明できへんねんけども、自分だけ道間違えてるいうか、みんなからはぐれて行ってるいう気が物凄うしてきてんて。けど、道は一本道やし、前を歩いてる人もちゃんと見えてる。何度も気のせいやて自分に言い聞かせて歩き続けた。けど、気色の悪い違和感はなくなるどころか強うなる一方や」

「だいじようぶ。だいじようぶ。大野さんの背中がすぐそこに見えるじゃないか。杖を突いて鈴を振って……」

「ふっと、違和感の正体がわかった。自分の前を歩いてる人な、確かに白装束で杖突いて鈴を振ってはるねんけど……、音がせえへんねん。右手は確かに動いてて鈴を振ってはるのにリッて音がしてへんかってんて」

ガタッ

三度。何の前触れもなく酔鏡の格子戸が音を立てた。あまりの間の良さに酔客達の顔は引きつった。年季の入った木枠の格子戸は蛍光灯の下で黒々と光り、黄泉路を閉ざす伝説の扉のように不穏にその老体を揺すり続けている。客達が見守る中、扉は禍々しいモノの侵入を拒むかのように上下に体を揺すって抵抗を続けていたが、やがてじりつ、じりつと引き開けられ、夏の宵闇が黒い口を開けた。

格子戸の向こうに、路地の街頭を背にして小柄な影が立っていた。

「お、しのぶちゃん今晚は。早う入りいや」

ユウヤんが影に向かつて声をかけたが、応いえはなかった。店に入ってきたしのぶの顔は血の気を感じさせぬほどに蒼白で表情はなく、目の焦点は宙を泳ぐばかりで結ばれる様子がない。格子戸を閉めることも忘れて、幽鬼のような足どりでカウンターの隅まで来ると脱力したように丸椅子に腰を落した。かろうじて指に引っ掛かっていたハンドバッグが足元に落ちた。

「どないしたん？」

あまりの異様な状況に誰もが口を開くことを躊躇っていたが、緊張に堪え切れなくなつたらしいバリキが口火を切った。

「あ」

しのぶの口から小さな声が漏れる。徐々に目の焦点が合い、驚いたような顔になって店の中を見回した。

「あの、私どうしてここにいるんでしょう？」

「その戸から入ってやな、歩いてその椅子んとこまで行って、ぺたんって座り込んだからや」

ユウヤんの答えは間が抜けて聞こえたが確かに他に答えようもない。

「あの、一つ訊いて良いですか？」

見知った面々がカウンターに並んでいるのに気付いて少し頬に朱が差したしのぶは、恐ろしい秘密を打ち明けるような口調で誰にもなく尋ねた。

「幽霊っていると思います？」

しのぶの代わりに格子戸を閉めに回っていたバリキの後ろ姿が大きく肩を落して小さくなったように見えた。

「俺、今日は帰ろかな」

バリキの呟きに覆い被さるるように、堪え切れなくなった雨が盛大に落ちてきた。

「なんやまるでコントみたいやな。バリキ、早よ閉めて。吹き込んで来るで」

笑い転げながらユウやんが言うそばから格子戸の足元に音を立てて大粒の雨がしぶき始める。バリキはやむなく戸を閉めると、屠場に向かう仔牛のような足どりで席に戻った。

「で、何？しのぶちゃんは幽霊見たん？」

「はい。あれはどう考えてもそうとしか思えないんです」

記憶が蘇ったのか、しのぶの頬がまた白くなり、小さな肩が微かに震えた。

「あの、熱爛をお願いします。うんと熱くして下さい」

細い両腕で肩を抱くようにしながら注文をするしのぶを見て山下が口を開きかけた。

「あ、山下さん、先に言うとききますで。そのしのぶちゃんな、どう見ても中学生にしか見えへんけど、れつきとした二十歳の大人ですから。お酒呑んでも問題なしですわ」

ユウやんが先回りをして解説する。

「良かったやんバリキ。もうすぐしのぶちゃん、お酒入るで。怖いことにはならへんて」
「からかうようにバリキに言ってから、ユウやんは山下の耳元に囁く。

「見ててや、良え土産話になるおもしろいもんが見られると思いますから」

雪平でつけられた燗酒の徳利と猪口がしのぶの前に並べられる。しのぶは細い指を伸ばして、流れるように美しい仕種で猪口に酒を注ぎ、その白い縁を桜色の唇にあてがった。思いの外に熱かったのか微かに唇が震えたが、そのまま猪口を傾けて流し込み、今日最初の一杯が口中から喉へと過ぎて行った。

ほう。と、桜色の唇から溜息が漏れた。

「あたし絶対霊感が強いんやと思いますわ」

いきなり甲高い娘の声が響いて、山下は目を瞠った。

「ちよつとユウやん、なに笑うてはるん。めっちゃ怖い目に遭うたんですよ、あたし」

「そら笑うて、こちらの山下さんなんか目え白黒させてはるやん」

山下に気付いてしのぶは律儀にお辞儀をした。項うなじの後ろでポニーテールが揺れる。

「あ、はじめまして、しのぶです。今年の一月に二十歳になったばかりです。大学で事務員してます」

主人が気を利かせてしのぶとセンセに山下がこの店に立ち寄った経緯いきさつをかい摘んで説明した。

「いや、自己紹介も良えけど、何があつたん？」

「ええやん、別に聞かんでも」

バリキが最後の抵抗を図る。

「そないなと言わんと聞いて下さい。あたし、幽霊を見てしもたんです。しかもお昼間から。」

今日、教授のお遣いであたし梅田のビルに行ってきたんです。三十階建ての高層ビルですよ。あたし、あんな高いビルに上ったん初めてですわ。教授のご用があったんは二十七階のオフィスでご用はすぐ済んだんです。けど、高層ビルなんて滅多に上りませんやん。折角やからすぐには帰らんとあたしその辺をキョロキョロ見て回ってたんですわ。おのぼりさんと思われんかったやろか？」

社会見学に来て迷子になった中学生と間違えられた可能性の方が高い。

「それで窓の方を見たらめつちや見晴らしが良いんですよ。道路走ってる自動車なんか爪楊枝みたいに小っちゃくて」

形容がよく分からないが小さかったことだけは伝わってくる。

「もうちよつと窓にひつついて見てみたいなあと思うてあたし、そろそろつ、そろそろつて、オフィスの人らに気付かれんように窓の方ににじり寄って行っただけです」

おそらく注目の的になっていたと思う。

「そしたら……、見てしもたんですわ」

斜めに吹き降る雨が網戸や板硝子を弾いて機銃のような音を立てている。雷は質たちの悪いしやつくりさながら、思い出したように音を立てては窓の外を白く光らせた。今や酔鏡は降りしづく驟雨はらの中、外界から孤立した小さな匣はこと化していた。

「窓の外をいきなり、すうつて」

「女の人か？」

「ちやいますて。そんなんやったら驚きません」

普通、驚くだろう。

「すうって、黒い箱が降りて来たんです。それで、その箱にネズミ色の服着た男の人が二人立ってはって、何してたと思えます？」

しのぶは爛酒を煽って続ける。

「なんや黒い棒を持って、窓を擦り始めたんですよ。あたし、ぎよつとして周りの様子を伺いましたわ。ところが、誰一人気付いてはらへんのです。みなさん普通にパソコン打ったり、なんや打ち合わせしてはるんです。中には明らかに窓を向いてはった方もおつたのに全く反応がないんですわ。背筋がぞわつとしました。二十七階ですよ。ビルの外っかわですよ。普通びっくりしますやん。あかん、あたし以外にはこの人らが見えてへんのやと、すぐにピンと来ました。で、怖いもん見たさで、もういっぺんそおつと窓の外を見たんです。そしたら、そのネズミ色の男の人といきなりバチって目が合うてしもて……。いやや、あたし幽霊と目え合わせてしもたんです」

目尻に涙を滲ませて唇をへの字に曲げるしのぶを男達は気の毒そうに見守った。

「それから後のことはよう覚えてません。熱に浮かされたみたいになって、三番街歩いてた気いもします。それで気が付いたらここに座ってたんです。あの、あたしちゃんと戸開けて入って来ましたよね？いきなりその辺にすうって立ってたりせんかったですよね？」

店の中はシンと水を打ったように静まり返っていて、声を発する物は誰もいない。

「ええと」

ややあって、バリキが気を取り直したように口を開いた。

「俺、パス。ユウヤン説明したつて」

いきなり振られてユウヤンは『なんでわしやねん』とぼやきながらパンチパーマの襟足を掻いていたが、このツツコみは自分にしかできんと悟ったのか渋々口を開いた。

「あのなしのぶちゃん。その人らはただの」

掃除の人や——という言葉がユウヤンの口から聞かれることは終ついにになかった。その瞬間、店の中は赤身を帯びた白い閃光で溢れかえり、皆が思わず目を瞑った。同時にこの世の終わりかと思うような轟音が迸り、誰もがその場に硬直した。

そして——、気が付くと店の中は暗くなっていた。

酔鏡から歩いて数分、豊かな杜を擁する古い神社がある。その杜の樹齢六百年の樹に落雷があったと主人がニュースで知ったのは翌日のことである。が、たった今、何が起きたかをすぐに判断できた者は誰もいなかった。轟音が引いた後には廃墟のような静けさが降りてきた。閃光の残滓ざんしは目の中に星のようにいつまでも瞬いて、自分が目を開いているのか閉じているのかさえもしばらくは分からなかった。そして、気が付くと店の中は闇になっていた。

「停電、か？」

一番最初に反応したのはバリキだった。

「いややあ、やっぱりあのネズミ男にあたし取り憑かれてしもたんや」

「あのなあ、掃除のおじさんがどないやって雷落すねん」

「ユウヤン、それツツコンでるのかボケてるのか分かりませんよ」

間近で落雷を体験した客達は一種のヒステリー状態になって、口々に不毛な言葉を発している。轟音は耳を鋭敏にするらしく、格子戸を叩く雨音が先程よりひとまわり大きく聞こえて皆のパニックを煽っていた。

と、カウンターの小さな火が点った。

「ないよりマシやろ。丁度、お仏壇のお蠟燭が切れたから買うて来たところやってん。後で片付けよう思ってたんやけど丁度良かったわ」

主人は小皿に蠟を垂らして蠟燭を固定すると火を点けて客達の前に置いて回った。

「ブレーカーがどうやとか言う問題やなさそうやな。ご近所みんな真っ暗や。本格的な停電みたいやで」

いつの間にか戸口に立ったバリキが外を伺いながら言った。

「こんな暗い中、よくほいほいそんなとこまで行けたな」

「俺の目は特別製やもん。最近はサバイバルゲームに凝ってるねん。暗視スコープなしでもある程度動けんと話にならん」

「相変わらず体動かす以外に興味のないやつちゃ」

「で、これからどうします？まあ、とても出て行ける天気ではなさそうですが」

雨は変わらず降りしびっている。

「料理も酒も出せるで。冷蔵庫もたちまちは大丈夫やろ。俺の手も特別製や。目瞑つっても包丁は握れる」

カウンターの他にも数本蠟燭を灯し終えた主人が妙なところでバリキに対抗する。食器棚の脇に山下の預けた風呂敷包みが蠟燭の火に浮き上がって見えた。

「ほな、呑み続けよか。いよいよ百物語みたいな舞台装置になってきた気がするけど」

「その話はもう良えやん」

「センセ、わし、しのぶちゃんと来たやろ。次はバリキの番やで」

「いつから順番制になったんや。俺はお化けの話なんかせんぞ」

断固とした口調で言ってバリキは焼酎のロックを頼んだ。

「せやかて、ゲストキャラの山下さんに振るのんも気が引けるしなあ。山下さん、なんぞ怖い話知ってはりますか？」

それでも聞いてしまうのがユウやんである。

「え？あ、ああ」

山下は気のない応えを返した。

「あ、すみません。少々考え事をしておりました。怖い話ですか？そうですねあ」

蠟燭に浮かび上がった角張った顔の中で目が細められた。総じてその容貌が時代がかって映るのは、この作り物めいた舞台装置によるところも大きい。闇に充たされた店内。抹香臭い蠟燭の灯。その灯に浮かび上がる常連達の別人のような貌。エアコンが止まって空気は

徐々に湿り気を帯び、肌にまとわりつく熱気を孕み始めている。

「怖いと言えるのかどうかわかりませんが、一つ思い出した話があります。丁度、私が考え事をしていたのはそのことで、人様が聞けば他愛のないことのようにも思えます。しかしね、私にとっては生涯で一番恐ろしいできごとだった」

山下の前にはセンセと同じ凍結酒が出されている。グラスの中のみぞれ状の酒を一口含んで山下は意外な言葉を口にした。

「ダイイング・メッセージというのをご存知ですか？」

「ダイビング・メッセージ？」

「しのぶちゃんは黙つとり。放つといたら十連発くらいオヤジギャグかまして話止めてしまいうや」

「ミステリーによく出てくるやつですか？」

センセが代表して尋ねる。

「被害者が犯人の正体を示すために死に際に残すメッセージで、警察や探偵にだけわかる暗号になっていたりする」

「ええ、まさにそのダイイング・メッセージです。ただ、言葉の意味からすれば死にかけている人物が殺人の被害者である必要はありませんし、残されるメッセージも犯人を糾弾するためのものでなくても構わないはず。広い意味では、死に行く者が残される者に託す伝言と考えて差し支えないでしょう」

山下はハムを箸先で千切ると醤油に浸けて口に入れた。山葵の辛味がつんと鼻を抜けた。

「私、ダイイングメッセージを受け取ったことがあるのです。ミステリーにあるような死体の傍らに書かれたメッセージを読んだといった無味乾燥な類ではありません。もつと生々しいやつです」

シヤク

山下が木の匙を回すと硝子瓶の中でみぞれの酒が崩れて音を立てた。

「目の前で臨終を迎えようとしていた私の娘が私に伝えようとした最期の伝言です」

シヤク

「娘の佳奈子は病を得て七歳で亡くなりました。生きていればそちらのしのぶさんと同じ二十歳だ。十三年前、佳奈子の臨終の折りに私は彼女からダイイングメッセージを受け取ったんですよ」

つるりと白髪頭を撫でると山下は目を細めて外の雨に耳をすませた。

「何やら佳奈子に足止めされているような気分だ。まだのぞみの時間には少し余裕がありますし、少々まどろっこしい話になるかもしれませんが聞いてもらえますか」

山下は凍結酒で喉を湿してから語り始めた。

「私は昭和十六年の生まれです。親父は大工でしたが体の弱かった私に跡を継がせる気はなく、金の心配がいらぬ勤め人にしたがりました。その希望通り私はサラリーマンになって

総務一筋で退職まで勤め上げました。職場結婚したのは三十五の歳でしたから遅めでしたな。娘が生まれたのはそれから十年後、四十半ばになってました。もうほとんど諦めていたから佳奈子が生まれた時はそりゃ嬉しかった」

山下は匙で凍結酒をかき混ぜながら口元を綻ばせた。

「よく笑う子でね。あの子がいるだけで家の中が春みたいに明るかった。それに、父親の私が言うのもなんですが、佳奈子は生まれつき異能とでも言いたくなる程、才芸に秀でた子供でした。殊に絵は凄かった。例えばまだ四つの頃、部屋に入ったら床一杯に細かく千切った折り紙を広げて嬉しそうに笑ってることがありました。私はまた派手なはずらをやらなかったもんだと笑ったのですが、『テーブルの上が上がってみて』とせがむんです。何かいたずらの続きがあるんだろうくらいのつもりで私はテーブルに上がりました」

気を持たせるように山下は酒を一口含んだ。

「テーブルから床を見下ろしたあの瞬間は死ぬまで忘れられないでしょう。床一杯にね。点描画が広がっていたんです。夕日に輝く海、海岸にしゃがんでいる少女と傍らに佇んでいる男。夏に連れて行った江ノ島の風景そのものが、色紙のわずかな色の濃淡で精緻に表現されていた。あれはまるで印象派のスーラの点描画を見ているようでした」

シヤク

凍結酒が匙に崩される音が殊更に響いた。まるで店自体が耳をそばだてているように静かだった。

「大仰なことを言うやつだとお思いでしょうな。まあ、あの光景は見た者でなきやわからない。どう言い繕っても誇張に聞こえちまいます」

山下は乾いた笑いを漏らした。

「才能に限らず佳奈子は総じて早熟な子供でした。世間には大人に叱られまいとして大人の顔色ばかり窺う子供が時々まおりますけれど、あの子は大人の顔色を読むんです。正確に顔色を読んで私や家内が何を考え、どうすれば喜ぶか、その小さな頭でちゃんと答えを導き出すんです」

シヤク、シヤク、シヤク、薄黄色いみぞれの酒を崩す音が神経質に響いた。

「誕生日やクリスマスに何が欲しいかそれとなく尋ねると、的を射るように私達が買い与えてやりたかった品物がその口をつくのですと不思議でした」

「何か特別なからくりでもあったのですか」

センセが尋ねた。

「いえ、特別なことは何も。ただあの子は目も耳も鋭かったです。私達夫婦の会話。家内がご近所さんとする会話。私や家内の電話。まさか聞いていないだろうと思うような大人の会話をあの子はよく聞き、大人の表情をよく見た。そして驚くほど理解していた。盗み聞きではありません。わかるまいと思って大っぴらに喋っていたのですから。そんな会話の端々で、私達が何をあの子に望んでいたのかあの子なりに探っていたようです」

言葉を切って山下は蠟燭の炎を見詰めて溜息を一つついた。

「甘え下手な子でね。人形のお店のセットが欲しいと思っていても、その言葉を呑み込んで絵本がほしいと口にするようなことがしばしばあった。あ、これは譬えが拙かったか。佳奈子は絵本や童話は大好きでした。面白い癖がありましたね。読み聞かせをしてみると、必ず続きの話を考えては聞かせてくれるんです。主人公の少女がいきなり大人になっていたり、舞台が童話の世界を飛び出して浅草になったり、別の童話の登場人物が乱入してきたり、設定は突飛なんです。話が筋はしっかりしていてね。いつの間にか私は続きの話を楽しみにしながら絵本を選ぶようになっていた」

いや、親馬鹿ですな——山下は笑った。

「そのうち自分で作った物語も聞かせてくれるようになったから、あの子には国語の才能もあったのかもしれませんが。他の教科の才能は未知数でしたけれど、算数については忘れられないできごとがあります。従姉が遊びに来た時、持っていた数学パズルの問題を佳奈子に出したのです。大人げない話だが、中学生の彼女は何事にもそつなく答えてしまう佳奈子に対抗意識を燃やしていたらしい」

「中学生向きの問題ですやろ。大人げないにもほどがあるわ」
ユウヤんが笑った。

「まあなぞなぞか、クイズのような問題でしたから。確かこんな問題でした。本当のことしか言わない人が住む正直村と嘘しかつかない人が住む嘘つき村が隣り合わせにある。あなたは村境で一人の男に出逢った。質問を一つだけしてどちらの村の人間か言い当てるには何

と尋ねますか？で、佳奈子はこう答えたんです」

『佳奈ちゃんなら今日は良い天気ですねって言うよ』

「従姉は佳奈子が問題を取り違えていると笑いました。これは挨拶の仕方の問題じゃないと。が、佳奈子は平然とこういったのです」

「今日が本当にお天気なら正直村の人は『そうですね』と答えるし、嘘つき村の人なら『いえ』と答えるはずだって」

軽い拍手が起きた。センセが山下の方に身を乗り出す。

「お見事。お嬢さんは科学の素養がおありだ。事象を評価するのに今日の天気のような客観的な物差しを用いるのは科学の基本です。お嬢さんは本能的にそれを知っていたようだ」

山下は満更でもない笑みを浮かべて酒を干すと、主人にもう一杯を注文した。

「元気だった佳奈子との最後の想い出はここなんですよ」

床を指差す山下に客達は怪訝そうな顔をした。

「小学校初めての夏休みに関西を旅行しました。神戸にも足を伸ばして、寺田君の家族と一緒に六甲山の牧場に行ったりしてね。絵の好きな佳奈子は特に寺田君と話が合ったようだ。牧場の草の上に並んで熱心にスケッチしていました。……、それが元気だった佳奈子との最後の想い出です」

目の前に出された凍結酒に匙を差しながら山下は言った。

「旅行から帰った夜。佳奈子は高熱を出しました。ひきつけのような発作を起こして泡を喰った私達は救急病院に駆け込みました。それでも小さな子供のことです。そういうこともあるだろうくらいに高を括っていたのです。しかし、現実はそのようではなかった。大きな病院で精密検査を受けるように勧められ、検査の結果はすぐにでも入院するようというものでした。月並みな譬えですが目の前が真っ暗になっちゃった」

心なしか蠟燭の灯に浮かぶ山下の影が濃くなったような気がした。

「気が遠くなるような確率でしか発症しない難病だそうです。病名を聞かされましたが正直覚えていません。まあ、死神に名刺もらったってありがたくもありませんが、余命は半年と聞かされれば、それ以外の情報はどうでも良いと思えました」

また一口、凍結酒を含んで山下は口を開く。

「ユズリハという木は春に若葉が出揃うと古い葉が一斉に落ちるそうです。人間だってそうじゃなきやいけない。ユズリハよりユズラレハの方が先に落ちちまうなんてあっちゃいけない」

山下は何かを言いあぐねるように言葉を切った。唇を湿したり、匙で凍結酒をかき回したりしてしばらく逡巡していたが、やがて思い切るような顔になつて口を開いた。

「佳奈子が息を引き取るまで私は数えるほどしか病院に顔を出しませんでした。何だかだと理由をつけては家内に任せきり、たまに顔を出してもろくに話もせず、それどころかあの子とまともに顔も合わせず、医者の話だけ聞いて帰ることもありました」

シヤク

匙をかき回す音が虚ろに響いた。

「ええ、わかってます。体の良い現実逃避ですよ。痩せ細っていく娘を見るのが怖くて、見なければ全部嘘になるとでもいうように逃げ回っていたんです。酷い父親だ」

客達の間で感想とも溜息ともつかない声が漏れた。

「だから最後の最後で罰を受けた。逃げ続けた罰として一生忘れられない伝言を受け取る羽目になった」

シヤク、シヤク

「病院に行ってやって欲しい。家内がたまり兼ねたように切り出したのは年が明けてだいぶ経った頃でした。何か欲しがっているものがあるようだ。それを私から聞き出してやってほしいと。その声は懇願するようでしたが目は恨めしげにじっとこちらを見詰めておりました。『そのうちに』とは言わせない気迫を感じて私はしぶしぶその週末に病院に向かいました。外は寒かったが病棟は心地好い温度に保たれておりました。にも拘らず、あの病室に入った途端に背筋がぞくりとしたのはどういうわけでしょう。佳奈子のベッドはカーテンに遮られていて中の様子は窥えませんでした。カーテンをそっと開いて中を覗くと骸骨のように痩せこけた三歳くらいの少女が首まで布団を被って眠っていました」

『おとう……さん』

「物音に気付いて少女はうつすらと目を開きました。そして私に気付くと、噎れた老婆のような声でそう言ったのです。私はつきり病室を間違えたと思って、慌てて枕元のプレー

トを覗き込みました」

山下佳奈子——、間違いなくプレートにはそう書かれていた。

「虚ろな目を向けてくる娘から逃れるように後退りすると、あろうことか私は病室から逃げ出したのです」

格子戸には相変わらず雨が降りしぶき、雷が遠くで鳴り続けている。店の中だけがしんと静まり返っていた。

「主治医から説明された佳奈子の容体は最悪でした。未だ意識が残っているのが奇跡的だ」と何の慰めにもならない言葉を告げられたのです。けれど、その言葉が私の背中を押してようやく病室に足を向けさせました。会うなら今しかないという想いに叱咤されて私は再び病室に入ったのです」

山下の纏う影がまた一段と濃くなった気がした。

「佳奈子の眼差しは焦点が定まらず、もう私の姿も見えていないようでした。が、『佳奈ちゃん』と私が呼びかけると不意に彼女の口元が引き攣り何の感情の光も宿していなかった眼が微かに揺らいだように見えました。急いで私が彼女の枕元に寄るとベッドの上でわずかに身じろぎをして娘は私の姿を捉えたようでした」

『おとうさん』

「意外にはっきりとした声で佳奈子が言いました。が、その一言と一緒に精気まで零れ落ちたかのようにその目はみるみる光を失っていききました」

『何か欲しいものがあるんだって？』山下はそう話しかけたと自嘲気味に言って舌を凍えさせる酒を一口飲んだ。

「なんて間の抜けた、そして実のない言葉だったでしょう。だが、それがその時の私の精一杯の言葉でした。弱々しく口を開いて佳奈子は何か言いかけてましたが、すぐに咳き込んで語尾が途切れれました。喋らせてはいけないと思い、私は佳奈子を抱き起こすと背中をさすってやりながら『何も言わなくていいよ』と何度も呟きました。佳奈子はヒーツ、ヒーツと悲壮な息を漏らしていましたが暫く抱いてやっていると落ち着いたのかそれも止みました。私がそつと佳奈子をベッドに戻してやろうとした時、私の耳元でその声が囁かれたのです」

『ごめん……なさい』

「言葉とは裏腹に老婆のように噎れて凄味のある声に私は竦みました。この期に及んで何を詫びることがあるというのでしょうか。甘え下手な娘の性格を考えると、その詫び言葉が実は恨みの言葉の裏返しじゃないかと私には思えて仕方がなかった。不意に腕の中の佳奈子が重たくなつた気がして、私はたまたまらず娘をベッドに戻しました」

『でも、……かなちゃんね』

「凄惨なという言葉が似つかわしい笑みを浮かべて佳奈子はうわ言のように呟きました」

『イマタ……』

「佳奈子は続けて何か言いかけてました。が、また咳き込みました。気力を振り絞ってその咳を呑み込むと、物凄いい目で私を睨んでこう言ったのです」

『……タタルノ』

「『崇るの』——娘ははつきりとそう言いました。まるで私の不実をなじるようなその一言に私は竦み上がりました。これは罰だ。病みついた娘から逃げ回り、寂しい想いをさせ続けた私に与えられた呪いだと思いました。冥く済いようなないその声音に、崇るといふその言葉に、私は呪いを襲ったのです」

また一口、山下は酒を呑んだ。

「佳奈子はすぐに咳き込んで老人のような形相に顔を歪めました。が、私は金縛りにかかったように体を動かすことができず、じつと娘を見詰めているばかりでした。その私に叩き付けるように佳奈子はまた言葉を吐き出しました」

『……、めえじゃんか』

「不明瞭に掠れて全ては聞き取れませんでした。近所の悪童がよく口にする悪罵、恐らくは『当たり前めえじゃんか』と浴びせられてます。私は心を凍らせました。当たり前——そうだ。私は罰を受けて当たり前だ。病苦に喘ぐ娘を見捨てたのだから当たり前だ。私は自分が娘を見捨てて逃げ出していたことをその時はつきりと自覚しました」

山下はカウンターに両肘をつくとうずくまるようにその上に額を載せた。

「それが……、佳奈子の最期の言葉になりました。佳奈子はそのままひきつけを起こしたようにもがきだして、慌ててナースコールを押したのですが手遅れでした」

『佳奈ちゃんね。崇るの』

私を睨み据える冥い目とともに、ユズラレハはユズリハに凍えるような伝言を遺こして逝ってしまったのです——言葉を吐き出すと山下は凍結酒を呑み干した。

店の中の闇が重く沈んで濃さを増したような気がした。

「ま、まあ。他人のわしが言うのも無責任な話やけど、気にし過ぎん方が良えのんちやいますか？」

ユウやんが遠慮がちに口を開いた。

「大人でも重病で譫言を口走ることはあるもんや。まして小さな子供さんやったら自分でも何言うてるのか分からんこと口走ったりするもんやて」

が、山下は淋しそうに首を振った。

「確かにその直後、娘の意識は混濁しました。でもあの瞬間、佳奈子には私が見えていましたし言葉もはっきりしていた。あの伝言は私に宛てられたもので、明確な意志もあつたと思うのです」

「せやけど……」

バリキが焼酎のロックのお代わりを頼みながら言った。

「ラグビーの試合とかでクラッシュした時に譫言をよう聞くけど、呂律が怪しうて何言うてるんかわからん時がありますよ。言おうとしてることははっきりしとつても聞き違えるというのはありそうやと思います」

「それは私も考えました。むしろそれに縋りたかった。でも思い付かないんですよ。『佳奈ちゃ

ん崇るの。当たり前えじゃんか』一体何と聞き違えたというのでしょ

「うーん」

考え込むバリキの横でセンセが手を打った。

「a total measure——つまり、『完全な案』と言ったのではないでしょ

「つて、なんで英語やねん」

「いや、日本語という思い込みが目隠しをしているのかもしれない。例えば……」

センセはしのぶの真似をして胸の前で手を組んでうっとりとした目付きになった。が、蠟燭に浮かぶその姿は死神博士が科を作っているようにしか見えず常連たちを戦かせた。よく見ればその目はうっとりというより単なる酔っ払いのそれに見えない。強い酒にさすがのセンセも些か過ぎたようだ。

「佳奈子さんの向かいのベッドにはアメリカ人の少女が入院していたのです。年の近かった二人はあつという間に仲良くなり……」

「頼むから裏声で喋るんやめて」

「ええつ、あたしそんな喋り方ちやいます」

「山下さん、真面目に悩んではるねんから……」

センセの声は常連たちの機銃掃射に晒された。

「だいたい、『完璧な案』つて何なん？」

「ええと、山下さんは佳奈子さんに『何か欲しいものはないか』と尋ねられたのですよね。そ

れに対して佳奈子さんは予てから欲しいものがあつたのです。それで、『私には完璧な案がある』と言いかけたところで……」

「うわっ、誰か止めて。整理するとアメリカ人と仲良くなった佳奈子ちゃんは英語が喋れるようになつとって、久しぶりに会つたお父さんに、つい英語で喋ってしまったと」

「はい」

「裏声はええて。なんでネイティブ日本人のお父さんに英語で話しかけるねん。却下や」
バリキが言下に判定を下した。

「わし思うんやけど、その声は佳奈子ちゃんの声やなかつたんちやうやろか」
ユウやんがハムの最後の一切れをつつきながら言った。

「また、地縛霊が憑いとつたとか、しょうもないこと言うんちやうやろな」
バリキが身構えた。

「ちやうちやう、まつとうな話や。山下さんはその日病院に行く時に内心びくびくしてはつたんとちやいます？理由はなんであれ、ほとんど娘さんに会いに来んかつたんや。恨み言の一つや二つ言われてもおかしくない。いや完全に嫌われてしても、今さら何しに来たんとか言われたら嫌やなとか、逆にあんた誰やと冷たい目で見られたらどないしよとか、いろいろあぐねてたんとちやいます？」

「確かに考えていました。病室に入るのを何度も躊躇ったぐらいですから」
その言葉にユウやんは頷いた。

「佳奈子ちゃんはその時、何か言わはったんやと思います。けど、山下さんは変わり果てた娘の姿に気を奪われて何と言ったか聞き取れてへんかった。上の空のまま自分が言われたら一番嫌やと思う言葉に無意識のうちに置き換えたんちゃいますやろか？せやから、わしその声は佳奈子ちゃんの声やのうて自分を責める山下さんの心の声やったんちゃうかと思いましてん」

「なんやまっとうな意見言う時もあるんや」

「いや、これがわしの地やて」

ユウヤんはそつと山下の横顔を見遣った。

「確かに一理あります」

凍結酒を口に含みながら苦いものを飲み下すように山下が言った。

「何度かそう思おうとしました。でも、やはり違うんです。佳奈子は確かに『崇るの』と言ったのです」

山下の言葉は頑かたくなだった。

「ああつ」

「な、なんやねんしのぶちやん」

「あたし、えらいこと思い付きました」

「く、空気読みや。ぜったいその『えらいこと』は今言わん方が良えから」
バリキが止めにかかる。

「いや、そやかて聞いて下さいよ。みなさん佳奈子ちゃんがえらい大人びた子供やったいうことを忘れてはるんちゃいます？」

常連達は予測不能な脱力感の襲来に身構えた。

「大人のしてることに背伸びしてでも混ざりたい年頃ですやん。『たたるの』ではなくて、『わかるの』と言わはったんちゃいます？」

蠟燭の灯にしのぶのどや顔が浮かんだ。

「次の言葉で山下さんは『めえじゃんか』しか聞き取れんかったんですよね。それもそのはずです。そもそも、その前の言葉はなかったんですよ。それを似た言葉で補おうとして『あたりめえじゃんか』と思ったことが袋小路に繋がったんです」

「で？」

おざなりな口調でバリキが訊く。

「佳奈子ちゃんはこう言いたかったんちゃいます？『わかるの、マージャンが』だから今度は混ぜてねって」

「そのシチュエーションで言うことかい」

バリキが溜息をつくように言った。山下が元気なく笑った。

「いや、本当につまらない話をしてしまった。場を盛り下げてしまっって申し訳ありません」
言っって山下は席を立とうとした。

「ちよつ、ちよつと待って。まだ雨足も強いですやん。それにこのまま帰られたら関西の土地

柄疑われそうや」

ユウやんが恨めしげにしのおぶを見る。

「わしらにもう一回チャンス下さい。バリキ、しのおちゃんのメガネ外したり」

「そうか、最初からそうすれば良かった」

怪訝そうな顔をする山下を尻目に『おう』と応えてバリキはすつとしのおぶの背後に立つと銀縁メガネを取り、ポニーテールのリボンを解いた。

長い髪が重たげに肩に落ち、その先がカウンターに広がった。その髪を振り払おうともせず、流れるに任せたまましのおぶはゆつくりと顔を上げた。両の手がカウンターの上を滑るように動き、胸の前で祈りを捧げるように軽く組まれた。

リン

軒先に下がった風鈴が鳴った。格子戸を叩く雨音が心なしか遠退いた気がした。

「……ごめんさい」

小さな声をした。あどけないその声に驚いて山下が顔を上げる。蠟燭の灯の向こうに自分を見詰めるつぶらな瞳があった。揺らぐ炎に陰影を濃くした黒髪。それに縁取られた面長な顔立ち、笑ましげに端をくつと上げた小さな唇。初めて見るはずなのに、その面差しにも、物言いたげな眼差しにも、見覚えがある気がして山下は奇妙な懐かしさを覚えた。

「でも、考え過ぎだよ」

声がまた響いた。決して大きくはないその声は降りしづく雨音にかき消されることもなく

よく通った。

「だって七歳の女の子がたたるなんてことば、ふつう知らないよ。知ってたってそんな時に使うはずないじゃない」

小さな唇は哀しそうな笑みを浮かべた。

「それに『当たり前めえじゃん』なんて言葉も一度だって使ったことないでしょ。せきをして苦しい時にいきなり出てくるわけないよ」

言って今度は少しおかしそうに笑った。

「あの時、何か欲しいものはないかって聞いてくれたでしょ。すぐくうれしかったの。だって、もう先^{せん}からずつとほしいものがあつたから」

しわぶきひとつ聞こえない静まり返った店の中で、そのあどけない声は響く。

「でもきつと、それはおとうさんもおかあさんも欲しがらないものだと思ったから、先に謝ったの」

『ごめん……なさい』——って先に謝っておいたの。そう言ってまた笑う。よく笑う子でね。

——山下の言葉が客達の脳裏に蘇った。

「さいしよは、ふつうに『妹が』って言いかけたんだけどせきでうまく言えなかったから……」

言葉を切って大きく息を吸い込んだのだろう。蠟燭の炎が今にも消えそうなほど揺らいだ。その炎の向こうで小さな唇が一息に動いた。

「佳奈ちゃんね、トトロのメイちゃんがほしかったの」

炎が震える。

「わたしが死んだらおとうさんも、おかあさんもきつと悲しむ。でも、あんな元気な妹が生まれたら悲しい気持ちも軽くなるかなって思ったから」

不意にその目に涙が溢れた。

「わたし、死にたくなかった。もつと、おとうさんやおかあさんと一緒にいたかった。でも、どんな体が苦しくなつて、思うように動かなくなつて、もうすぐ死ぬんだつてこともわかってた。だから妹がほしかったの。わたしがいなくなつてもおとうさん達が悲しまないように。わたしの代わりにかわいがつてもらえるように」

引きも切らずに雨は降りしづく。遠雷おんらいは時に近くまた遠く地を揺るがし、夜の闇に赤く瞬く。涙を溜めた瞳はそれでも揺らぐことなく真っ直ぐに山下に向けられていた。

「おとうさん、わたしをきらいにならいで」

すがるような眼差しが山下を見詰めた。

「なるわけないじゃないか」

山下もその目を見返しながら言い放った。

「でも、わたし長いことおとうさんを苦しめたから」

「なるわけ……ないじゃないか」

山下の声は震えながら掠れた。——子供を嫌いになる親がどこの世界にいる。

「ならもう自分をいじめるのは止して。わたしのことで苦しむおとうさんを見たくないよ」

山下は肩を震わせて項垂れた。

「今でも童話を書いてるんですよ。わたしお父さんのおはなし大好きだよ。だから、わたしのことで止めるなんていわないでね」

山下は俯いたまま低い声で泣いていた。その声は切れ切れに続いていたが、やがて人目も憚らない声に変わった。

「おとうさん」

声を上げて泣いていた山下はその声に顔を上げた。すぐ目の前に二十歳になった娘が立っていた。白く細い指で彼女は山下の老いた手を握って呟いた。

「おとうさんとおかあさんの子供に生まれて良かった。わたしとっても楽しかったよ」

横なぐりの雨が一頻り格子戸を打って潮のように引いていった。いつの間にか遠雷も止んでいる。二度三度またたいて、天井の蛍光灯が点った。ブーンという冷蔵庫のモーター音がやたら耳についた。

「な、なんやったん？」

バリキが見知らぬ場所に放り出されたような顔で店の中を見回した。

「わしの聞き違いやなかったら、童話がどうかって言うてたけど……」

ユウヤンもおそろおそろ口を開いた。

「聞き違いじゃありません。私は佳奈子に童話を書いてやっていました。新しい話を書くときりゃあ喜んでくれてね」

山下は畏怖するようにしのおぶを見詰めながら言った。

「あの子が亡くなった後も、私は童話を書き続けていました。そうしていればいつか天国のあの子も許してくれるような気がしていましたから」

山下は気を取り直すように凍結酒のおかわりと何か肴になるものを頼んだ。

「佳奈子はよく『おとうさんのおはなしが本になったらいいの』と言ってってくれてました。まあ、子供が言うことですから夢みたいな話です。でも、確かにそれは私と佳奈子のいつか叶えた夢ではあったのです。自費出版でも本にしようと思つたことが何度かありました。ただそれを実現しようとする度に最期の言葉が蘇ってくるのです。あの引き攣った目で睨む娘の顔がそんなことは希んでいなかったと私に思い知らせるのです」

山下はしのおぶの方に向き直り丁寧に頭を下げた。

「夢を見させてくれてありがとう。しかし、肝が冷えました。まるで娘が生まれ変わったみたいに誰も知らないはずの童話のことをあなたは口にした。刹那、私は幽霊を信じそうになつてしまいましたよ」

言つて山下は悪戯っぽく笑つた。

「あの風呂敷包みに気付かれたのですね」

山下は主人の後ろに置いてある紫色の縮緬の包みを見遣つた。

「ごめんなさい」

しのおぶは身を縮めて頭を下げた。

「夢中だったんです。誤解を解きたくて……。でもあんなやり方、卑怯でした」

項垂れたまましのぶは涙声で詫びた。

「ちよつと待って下さい。私は責めてるんじゃないやありません。いや、これは私の言い方がまずかったです。こちらこそ申し訳ない」

山下はしのぶの肩を優しく掴んだ。それでもしのぶは頭を上げなかった。彼女のスカートの膝にこぼれ落ちる滴がしみを作った。

「あの風呂敷があそこに置いてあるのに気付いたらたまらなくなりました。佳奈子ちゃんはそのなこと思っていない。息を引き取る間際に自分のことよりおとうさんのことを心配している女の子がそんなこと言うはずがないって。でも軽率でした。ごめんなさい」

言って肩を震わせたしのぶの頭を山下は優しく撫でた。

「あなたは本当に優しい娘さんだ。ありがとう。あなたは佳奈子が一番喜ぶことをして下さいなんです。なんで詫びる必要がありますか。さ、頭を上げて下さい」

しのぶの頭を撫で続ける山下の目尻からも涙が流れていた。しのぶは恐る恐る頭を上げて山下を見上げた。ポケットから木綿のハンカチを出して山下はしのぶの涙を拭いた。

「ありがとう。もう泣かないで」

山下は自分の目尻を乱暴に擦りながら笑った。その笑顔を見てしのぶもようやくやくへの字に結んだ口元を緩めた。

「あとう」

ユウやんが遠慮がちに声をかけた。

「盛り上がっているとこ申し訳ないねんけどな。残りの客と大将を代表して言わしてもらおうで。お二人が何の話をしているのかさっぱりわからへんねんけど」

言われたしのぶはきよとんとした顔になった。それから山下と目を合わせると二人してくすくす笑いだした。

「うわっ、しのぶちゃんめっちゃ根性悪う。どうせわからんわしらの方がアホですよーだ」
ユウやんの言葉にしのぶはようやく笑いを収めて真顔になった。

「ごめんなさい。わたしそこに置いてある風呂敷包みを見て、はてなと思ったんです」
「ちよ、ちよっと待って。せつかく謎解き聞かせてもらうんや。酒と肴を揃えたいやん」

ユウやんが手を挙げて制した。間の良いことに山下の前に肴が出された。

「叩きオクラと茗荷の刻んだのを焼き味噌で和えてみてん。味が濃いからちびちびいけますよ」

主人の言葉に皆が飛び付いて同じ皿と酒のお代わりが並んだ。

「お店の中が真っ暗になってマスターが蝋燭に火を点けられた時、食器棚の横にその風呂敷包みが置かれてるのに気付きました」

しのぶは『あつ』と言いながら新しい燗酒を口に含んだ。

「わたし、マスターが調理に必要なもの以外をカウンターの前に置いているのを見たことがあります。ということはその包みは預かり物。しかもわざわざ調理場に持ち出されていると

いうことは今晚取りに来られる方がいて、渡し忘れないようにするために目に立つところに置かれたのかなと思いました」

言って初めて小鉢の中身に箸をつける。焼き味噌の濃厚な風味が口一杯に広がって、しのぶはほうつと溜息をついた。

「この中で山下さん以外は常連ですから渡し忘れたとしても、いつでも取りに来れます。だから、お昼間に一度来られた山下さんが、帰りに引き取るからと言って預けて行かれた可能性が高いと思いました」

また言葉を切って、酒を一口呑む。

「風呂敷って袋やかぼんと違って中身の形がはっきり出るものですよね。事務の仕事をしているからすぐにピンと来ました。その大きさがA4版の紙の大きさです」

「確かにそれくらいの大きさですね」

センセが頷く。

「手荷物が多少嵩張るとしても、普通は見ず知らずの居酒屋に預けたりはしません。よほどこれから行く先にその荷物を持って行くのが憚られたのかなと思いました」

更に杯を煽る。

「だったらむしろ駅のコインロッカーに預ける方が自然です。でも風呂敷包みはここに預けられました。これってどういうことだろうと不思議に思ったんです」

「なるほど、推理の取っかかりはそこだったわけですか」

凍結酒をかき混ぜながら山下は頷いた。

「駅を出た時、たぶん山下さんはまだその荷物を持って行くつもりだったんじゃないでしょうか。けれど、マスターに道を訊き、お店の中で地図を描いてもらうのを待つ間に気持ちが変わったんだと思うんです」

「なんで変わったんやろ」

ユウやんが合の手を打つように訊いた。

「お店の中でこれから向かう寺田先生と関わりのあるものと言ったらこれだけです」

しのぶは立ち上がると少し危なっかしい足どりで壁際のパステル画に歩み寄った。メガネを外しているせいだろう、額を擦りつけるように目を近付けてその絵を見詰める。やがて振り返ってにっこり笑うところ言った。

「この絵をご覧になったからだと思います」

それを見遣りながら山下が頷いた。

「そう、そのパステル画です。寺田君はそのモチーフで何枚か描いていて、私は最初の一枚を見たことがあります。だから、すぐに彼の絵だと分かりました。その少女のモデルね、元気な頃の佳奈子なんです。六甲山の牧場でなだらかな芝生の傾斜を佳奈子が駆け上がったところですよ。たまたま道を訊いた店でその絵を見付けてしまったことに私は因縁を感じました。その背中を向けた少女の見えない顔があの日佳奈子そっくりに私を睨み付けている気がしてならなかった」

それは考え過ぎだと言える者は誰もいなかった。

「それでもその時はもう道を尋ねた後。教えてもらった家は駅とは逆方向で今更駅に戻ろうとすれば間違はなくご主人に呼び止められてしまいます。それで無理を押ししてご主人に荷物を預かってもらったというわけです」

しのぶは席に戻ると正面に向き直り風呂敷包みを見遣った。

「その包みは四角い箱のように大きさがきっかり揃っています。もし、山下さんが今なさっている郷土史の資料のようなものならもつとでこぼこがあるはずです。それと……」

しのぶは少し思案するように目を細めながら言った。

「荷物を包むのに風呂敷を使われているというのが気になりました。単に古風なご趣味なのかもしれませんけど今日日なかなか見かけませんよね。普通は手提げ鞆などに入れます。でも、あるシチュエーションなら風呂敷の方が断然便利な場合があります。それは、中身を先方に置いて帰る場合です。これから遠方に帰らないといけないのなら尚のこと手提げ鞆はかさばって邪魔になります。でも、空になった風呂敷なら畳めばそのトランクにしまえます。だから、もしかしたら風呂敷の中身は寺田先生のお宅に置いて帰るつもりのものかもしれないと考えました。寺田先生は童話の挿絵画家。そこに持ち込んで置いて帰るきっかりA4版サイズの包みと言えば童話の原稿と考えるのが自然です。どうして山下さんはここまで来てそれを持ち込むことを躊躇ったんだらうと思っていたら佳奈子さんの屈託を語って下さいました。その屈託が今でも山下さんを縛っている。しかもそれは佳奈子さんの想いで

はなくて山下さんの思いが自身を戒めてしまっている気がしたんです」

しのぶは息継ぎをするように杯を煽った。

「正直、ダイニングメッセージの解釈が合っているかどうかはわかりません。でも、わたしもバリキさんの意見に賛成です」

言われたバリキはきよんとした顔になった。

『『崇るの』なんて、そのシチュエーションで言うことかい』

バリキの口真似で言っつてしのぶは破顔した。店はまた静かになった。主人が格子窓を開く。雨上がりのひんやりと心地好い風が入ってきた。

「なんと言ったら良いんでしょう。たったそれだけのことでそこまで見抜く方がいらっしやるんですなあ」

言っつて山下はグラスを旨そうに傾けた。

「あの、不躰にならないと良いのですけど、佳奈子さんのためにもあの原稿を寺田先生のところにお持ちになって下さい」

しのぶは生真面目に頭を下げた。長い髪がふわりと揺れた。

「生きていればあなたのようなお嬢さんに育っていたでしょうか」

目を細めて山下はしのぶのその姿を見ていたが、やおら立ち上がると深々と頭を下げた。

「こちらこそ恩に切ります。ようやく心が軽くなりました。今晚神戸に泊まって明日もう一度寺田君の家を訪ねます。実は彼には原稿のことを話していて、今日は一度読んでも

らうために訪ねたのです。先程忘れてほしいと詫びたばかりですが構いませんまい」

笑って山下は席に戻るとグラスを乾して『勘定を』と言った。

「あの……、もうひとつだけ良いですか？」

しのぶはおずおずと切り出して山下を引き止めた。

「その絵のことなんです」

しのぶの目線を追って皆が壁のパステル画を見遣る。

「わたし絵のことは何もわからないのですが、その絵の下半分、点描で描かれた草原の部分ってパステルじゃなくて、もつと伸び難くい画材が使われている気がするんです」

しのぶの言葉に男達は思い思いに立ち上がってしげしげと絵を眺めた。

「言われたらそんな気もするけどようわからんなあ。で、それがどないしたん」

ユウヤンが首を捻りながら言う。

「その草原ってもしかしてクレヨンで描かれたものじゃないでしょうか。というより、クレヨンで描かれた草原に後からオイルパステルで少女が描かれたように思えるんです」

「絵のことは何もわからん言うわりには、えらい目が利くやん」

バリキが呆れたように言う。

「いえ、本当に絵のことは何もわからないんです。ただ、その絵のサインを見てそう思っただけで……。二行のサインって普通ないですよね」

言われて絵の右下を見た男達は『あっ』と声を上げた。

K. Yamashita

T. Terada

そこには、二行のサインが書かれてあった。

「その草原は六甲山の牧場で描かれた佳奈子ちゃんの遺作だと思います。それに寺田先生が加筆されたんじゃないでしょうか？」

「けど、なんでそんな大事な絵がここにあるんやろ。わしも絵のことはわからんけど、飲食店に飾ったら傷むんちゃう？」

「寺田先生は本職ですから、ちゃんとクレヨンコートで絵を保護してからお持ちになっていると思います。でも、確かに飲食店には飾らない方が良い気がわたしもします」

「その理由やったら俺がわかる気がする」

客達が声に振り向くと主人が目を細めてじつとパステル画を見詰めていた。

「俺もようやく寺田センセがその絵をくればった意味がわかったわ。山下さんがここに来られたのは今日が初めてやないんですよ」

怪訝そうな山下に主人は言う。

「俺も最初はわからんかったけど真っ暗な中で佳奈子ちゃんのこと聞いてるうちに思い出したことがあります。十年以上前、寺田先生がお友達を連れて来られたことがあります。いつも一人ではるセンセが珍しいなと思うたんでよう覚えてます。そのお連れさんが小さい女の子連れてはったから尚更ですわ」

「寺田君の鼻眞の店だと聞いた記憶がありますが……、あの時夕飯を頂いたのがここでしたか。思えば、あれが佳奈子との最後の夕食になったのです。よほど料理が口に合ったのか……いや、失礼。『おいしい、おいしい』を連発していました。この絵は寺田君なりの供養ということかな」

つくづく因縁ですな——そう言って山下はまた丸椅子に座り込んだ。

「ま、来年で四十年の老舗ですから、いろんなことがありますわ」

言って主人はにと笑った。軒から下がった風鈴がしきりに涼やかな音を響かせる。先程まで荒れに荒れていた雷雨がうそのように穏やかな風が吹き、格子窓から見上げると月が掛かっていた。

半年後、寺田の後押しもあって山下の童話が書店に並んだ。表紙はあの丘に立つ少女のパステル画である。ページをめくっていくと幼い佳奈子が大人になった自分を夢想する場面がある。そのページの挿絵にはポニーテールに小さな眼鏡をかけた生真面目そうなそれだけでどこか愛嬌のある娘が描かれていた。

(第四夜 了)